

令和7年度 小平市立小平第十二小学校 学校評価報告書

学校教育目標 ○明るく元気でたくましい子 ○よく考えすすんで実行する子 ○たがいになかよくする子

目指す学校像（ビジョン）

- 【目指す学校像】 こどもも、大人も、みんなの笑顔があふれる学校
- 【目指す教員像】
 - ・児童を心から慈しみ理解し、児童の良さや個性を引き出し伸ばす教職員
 - ・自らの課題を認識し、日々研鑽に努めるとともに、協働して磨き合う教職員
 - ・地域を愛し、地域や保護者と共感し、積極的に対話しながら信頼にこたえる教職員

前年度までの学校経営上の成果と課題

- ・児童自らが学習意欲をもち、すすんで学習に取り組み、様々な場面で満足感や達成感を味わえる教育活動を目指し、学力向上につなげていく。
- ・学習支援ボランティアやスクールサポートスタッフのさらなる活用を通して教員の働き方改革を進めるとともに、外部人材を活用した授業を行う。

	具体的方策	第1回評価		指標に基づく成果・課題・対策		第2回評価		学校関係者評価	指標に基づく成果・課題・次年度以降の対策
		取組指標	成果指標	取組指標	成果指標	取組指標	成果指標		
学力向上	・授業、朝学習、十二小タイム、スマイルネクストなどを活用し基礎的・基本的な内容について、常に確認したり、振り返ったりすることができるような学習を計画し、基礎的・基本的な内容についての定着を図る。	3	2	授業を中心として計画的に学習を進め、全国学力状況調査では、全国平均とほぼ同等の結果となった。しかし、基礎的・基本的な内容については定着しきれていない部分があるので、スマイルネクスト等の学習者用端末も活用しながら、個々の課題に合わせた学習が進められるように計画していく。	4	4	・朝学習、十二小タイム、学習者用端末の活用などを通して基礎的・基本的な内容の定着を図れた部分がある。一方で、思考力や表現力についてはさらに向上させていく必要がある。	・学校全体として、朝学習や十二小タイムなどの活動に対して年間を通して取り組み続けたことや効果的に学習者用端末を活用したことは、基礎的・基本的な力を定着させる上で一定の成果が表れた。 ・次年度以降も基礎的・基本的な内容に向けた取り組みについては継続するとともに、デジタルとアナログの活用場面を効果的に選択していく必要がある。	
	・校内研究では、国語科の読むことを中心として授業改善を図る。また、OJTを通して教員が相互に授業を見合う場を充実させ、指導力の向上へとつなげる。	4	3	校内研究では、昨年度の研究主題を継続し国語科についての指導力向上を目指して各分会で研究を進めている。OJTや授業観察と連携しながら、教員同士の学び合いが活性化することができるよう計画し、教員の学びが児童の学力向上へとつなげることができるようになっている。	4	3	・校内研究やOJTを通して教員間で学び合い、それぞれの指導力を高めたこととしても良く、今後も継続して取り組み続けて欲しい。	・1年間を通して校内研究で国語科の内容に取り組む中で、国語科についての理解を深めるとともに指導力の向上へとつなげることができた。また、OJTなどを通してそれぞれがもっている専門性を互いに学び、指導力を向上させることで児童の学力向上へとつなげることができた。今後はより児童と教員の実態に応じた形で、指導力向上を図る形で校内研究やOJTを進めていく必要がある。	
健全育成（いじめ防止）	・「十二小スタンダード」「十二小のやくそく」をもとに、安全で規律ある生活ができるよう指導する。 ・生活指導主任が、朝会等で生活規律について指導する機会を設け、学校全体で生活習慣の定着を目指す。	4	4	児童・教員間で月に1回十二小スタンダードの内容を確認する日を設けている。どの教員も同じ視点で共通の指導ができるよう、生活指導主任が夕会等で生活規律についての呼びかけを行っている。また、朝会や長期休み前などで児童向けの指導も行っている。取組に対して丁寧な指導を続けるとともに、ルールを守ることの大切さを考えさせ、実行できるようにする。	4	3	・ルールを守ることの大切さを考える機会を設けるのは効果的である。 ・普段から丁寧に児童の声を聴き、ふれあい月間でのアンケート等、いじめ防止に尽力している姿勢がうかがえる。	・月に1回学校のきまりを確認したり、振り返ったりする時間を設けることで、自分の行動を改めることができた児童がいた。また、長期休業前は生活規律と合わせてSOSの出し方についての指導も行い、児童の健全育成に取り組んだ。 ・課題を自分事として捉えられていない児童がいる。児童のみならず、家庭にも呼びかけを行いながらさらに指導を続けていく。	
	・普段の児童の変化を見逃さず、聞く姿勢を大切にしながら指導する。 ・年3回のふれあい月間を活用して、いじめ防止授業を行う。また児童理解アンケートを全児童対象に実施し実態の把握を行い、組織的に対応策を講じる。	4	3	引き続き、日頃の児童観察やふれあい月間での実態把握などを通して学年やブロックでいじめ防止の取り組みを進めていく。また今年度から「いじめ対応記録シート」を各学級担任が作成し、認知した見逃しや指導内容、保護者対応等を記録している。児童の小さな変化を見逃さず、学年間や生活指導主任、管理職への報告・連絡・相談を怠らないようにする。	4	3	・いじめをなくしていくためには、防止、早期発見、対処のそれぞれの観点での対応が必要である。今後も継続して学校全体で組織的な対応をお願いしたい。	・児童と積極的に関わり、信頼関係を築くことによって、児童の心の動きや変化などを日常的に察知できたことで、いじめの未然防止に努めた。今年度より作成を始めた「いじめ対応案件シート」が効果的に働いた。今後も記録を続け、全教職員間で内容を共有していく。 ・生活指導情報を学校全体で共有することを今後も継続し、いじめの未然防止に組織的に取り組んでいく。	
体力向上	朝活の運動、遊びの内容を精選し、運動が苦手な児童も楽しめるものにする。友達同士で学び合えるような授業展開を心掛ける。	3	4	児童は、体育の授業を通して友達同士で学び合う姿が見られた。運動会に向けての練習でも、友達と協力して行う姿が多く見られた。暑さのため、外での運動に制限がかかる日が多かったが、朝活は実施できたので、よい運動の機会になった。2学期以降も継続して運動を行う機会を充実させていく。	4	4	・朝活の充実により運動の機会を多くすることができた。しかし、暑さにより運動に制限がかかる時期が長くなっているため、運動の機会が減っていることが不安である。	・朝活の更なる充実を目指し、今後も運動や遊びの内容を精選していく。授業の中で友達同士学び合う姿が多く見られた。 ・猛暑で運動に制限がかかることは避けられない。そこで、授業の中で運動の楽しさを十分に感じさせ、放課後や休日などでの運動の機会につなげられるようにしたい。	
	給食の時間には机を班の形にして、友達と会話をしながら食べる喜びを味わわせる。また、栄養士が教室を回って食育指導を行う。家庭とも連携を図り、バランスよく食べることの大切さを指導する。	4	3	友達と会話しながら、楽しく給食の時間を過ごすことができていた。栄養士が教室に来て食育指導をしたことで、おかわりをしたり、調理士や農家への感謝の気持ちが高まったりしていた。偏食の子が多く、給食を残す子が多かった。面談や保護者会でも食育について話にし、家庭との連携をさらに図る必要がある。	4	3	・給食に絵本とコラボメニューがあったり、世界の料理が出たりなど、こどもたちが楽しく給食の時間を過ごす工夫を感じた。食育について家庭との連携をさらに強めていくとよい。	・栄養士による食育指導や絵本とコラボメニューなど、こどもたちが楽しく給食の時間を過ごす工夫を行うことができた。偏食の子への指導については、家庭との連携が必要になる。長期休業中に出している生活チェック表の活用し、家庭に食育への意識が高まるよう工夫していく。	
業務改善・働き方改革	教科等担任制を実施することで、教員の専門性を高めるとともに、教材研究や児童理解にあてる時間を確保する。	1	1	教科担任制は教材研究の時間が確保でき専門性が高まった。しかし、教科による時数の違いや校内研究と関連する教科や準備に時間がかかる教科など、教科ごとにかかる負担が大きく異なることが考えられる。また、担任するクラスの時間も少なくなることから、教科担任制であっても、教科や学年ごとに協力する体制が必要である。	2	2	・教科担任制が効果的に定着するためには、その目的や趣旨をそれぞれの教員が適正に理解できるようにすることが大切である。	・年間を通して、教科担任制で同じ教科の内容を複数の学級で授業することで、より良い授業づくりにつながったこと、また自身の教材研究を深めることができたことが評価アップにつながった。 ・担当教員が分担する教科をどのように決めるのかや教科の時数等により偏りが生まれないように細むことなどは、今後の課題である。	
	企画会や運営委員会を効果的に活用する。また、校務用端末を活用することで、会議を精選したり、事前に議題を把握したりする。時差勤務により、フレキシブルな働き方を推進する。	3	3	会議を精選したことで、放課後の時間を効率よく使うことができていた。運営委員会後、学年主任が伝達する際に、合わせて学年会を充実させるなど、更に効果的に活用していきたい。今年度は時差勤務を利用して、自分に合ったフレキシブルな働き方をしている職員が増え、働き方改革につながっている。	3	3	・会議の精選を行い、より良い指導のため教員が余裕をもって働ける環境づくりを高く評価する。 ・業務の改善や働き方改革は、できるだけ電子化する体制をつくる必要があると考える。	・会議を精選したことで放課後の時間を有効に使うことができていた。しかし、大きな行事などチーム十二小として情報が共通理解されていないこともある。 ・時差勤務の活用する教員が増え、自分のライフスタイルに合わせた働き方が進められた。しかし、業務量があり変わらず持ち帰り残業や効率悪化が起きているケースも考えられる。	
コミュニティ・スクール	各プロジェクトチームで課題を把握し、より専門的に解決を図っていく。保護者・地域ボランティアの活用を通して、教育活動をより充実したものにしている。	4	4	第一回のCS会議前に各プロジェクトチームで今後の取組について話し合い、6月の熟議の会で教職員とCSメンバー全員で共通理解することができた。「地域人材の専門性を生かした教育活動」、「働き方改革」の観点から、今後も保護者・地域ボランティアの参画を促していきたい。	4	4	・保護者・地域の学校支援ボランティアでは、一定の決まった方たちのみが参加している状況である。 ・学校ホームページやCSだよりを通して取り組みを家庭や地域に発信し、理解を得ていることを評価する。一方で、保護者のCSに対する認知度が低いようにも感じる。	・学校支援ボランティアの減少という課題に対してはより多くの協力を得られるよう、体制の強化を図る必要がある。また、情報や募集の発信をより早めにするなどの対策も必要である。 ・低学年の段階から保護者に参画いただく教育活動を多く取り入れるなど継続的な仕組みを構築していく。	
	学校ホームページやCSだよりを活用し、CSの取組を家庭・地域へ周知する。ボランティアを早めに募集し、より多くの方に参画いただけるよう促していく。	4	4	6月の土曜授業時の熟議の会では、教職員とCSメンバーが学校の様々な課題について話し合い、理解を深めることができた。話し合ったことを、各プロジェクトチームや学校運営に生かしていく。そこから保護者へもCSだより等を通して啓発していく。	4	4	・引き続き、学校ホームページやCSだよりを通して取り組みを発信していく。保護者のCSに対する認知度を上げていくために、学校ホームページ内の「地域」ページの更なる充実を力を注いでいく。		